

Effective infliximab therapy for the early regression of coronary artery aneurysm in Kawasaki disease

長友, 雄作

<https://doi.org/10.15017/4060260>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : (C) 2018 Elsevier B.V. All rights reserved.

(別紙様式2)

氏名	長友 雄作
論文名	Effective infliximab therapy for the early regression of coronary artery aneurysm in Kawasaki disease
論文調査委員	主査 九州大学 教授 筒井 裕之 副査 九州大学 教授 塩瀬 明 副査 九州大学 教授 澤 新一郎

論文審査の結果の要旨

【背景】川崎病(KD)急性期に使われるインフリキシマブ(IFX)が回復期に及ぼす影響については不明である。川崎病急性期に合併した冠動脈瘤(CAA)の回復期の退縮に、急性期に投与したIFXがどのように関連するかを研究した。

【方法】2005年から2016年の間に、3つの高次医療機関(九州大学病院、山口大学病院、JCHO九州病院)において入院した急性期KD患者連続971例中、CAAを合併した49症例(5%)を対象とした。IFX治療を受けた27例(IFX群)と受けなかった22例(非IFX群)に分類し、両群間におけるCAA累積残持続率を比較し、IFXがCAA退縮に及ぼす影響について検討した。

【結果】年齢、性別、および発熱期間は、両群間で差はなかった。最高CRP値およびIVIG総投与量はIFX群の方が高かった。合併CAAサイズのZスコアに差はなかったが、発症から2年、4年および6年でのCAA累積残存率はIFX群でそれぞれ24%、24%、24%、非IFX群で67%、52%、33%とIFX群のCAAはより早期に退縮した($p=0.03$)。さらに中等瘤以上のCAA症例においてもIFX群が早期に退縮していた($p=0.047$)。多変量解析では、CAAの最大Zスコア(ハザード比0.72、 $p=0.001$)およびIFXに対する反応性(ハザード比4.56、 $p=0.017$)が独立してCAA早期退縮に関連していた。

【結論】KD急性期のIFX治療は、合併したCAAの回復期以降の早期退縮に有効であることが示された。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが何れについても適切な回答を得た。

なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。